

## 長田 弘 (1939-2015)

詩人。1939 (昭和14) 年11月10日、福島市に生まれる。エッセーや評論、英米の絵本の翻訳など幅広い分野で活躍。著書に『詩人であること』『子どもの本の森へ』、子どもの本に『あいうえお、だよ』、翻訳に「詩人が贈る絵本」シリーズなど。2015 (平成27) 年5月3日、75歳で逝去。その蔵書は福島県立図書館に寄贈され、2017 (平成29) 年2月5日、「長田弘文庫」として開設された (詳細は当館発行の『郷土資料情報 No. 57』、『図書館報あづま通巻270号』)。福島との関わりや子どもの本の仕事については、前号 (No. 57) で触れた。今回は長田が残した言葉や文章から、子どもの本や「言葉」に対する考え方について紹介する。

### 「おくりものとしての子どもの本」

「子どもの本のありうべきすがた」について、長田はこう述べている。

おくりものとしての子どもの本。じぶんの言葉で子どもに語りかける、大人といま子どもであるものとの一対一の場に差し込まれる、おくりものとしての子どもの本。<sup>1</sup>

また、絵本については、

絵本という本のあり方のもっとも大きな特質は「手わたす」本であるということ。<sup>2</sup>

絵本や物語というのは、突きつめて言えば、世界のつくり方の秘密を子どもたちに伝える、方法としての本です。<sup>3</sup>

としている。臨床心理学者・河合隼雄との対談では、ユリー・シュルヴィッツの『よあけ』を例に挙げ、「(前略) おじいさんがそこで何をやっているのか、どうして子どもがそこで寝て夜を過ごすかということも、本当はよくわからない」としたうえで、一概には言えないとしながらも、「わからないから、読むことでそれに意味をあたえていくほかできないんです。その意味では (中略)、『よあけ』が中国の詩から着想を得ているように、絵本は「詩」に近いだろうと思いますね。」と語った。<sup>4</sup>なお長田は、子どもの本は大人も読むべきだ、読んでもいい、とも主張している。<sup>5</sup>

### 言葉へのこだわり

子どもの本の表記については、こんなこだわりを語っている。

最初にどういう表記に出会うかでちがってくるのは語感です。(中略)「話」「お話」「おはなし」がどう違うかということが、子どもの本では大事です。子どもたちは子どもの本からこういう語感を学んでいきます。<sup>6</sup>

それは、「父がはじめて買ってくれた本は、宮沢賢治の童話だった。わたしはいまでも、『どんぐりと山猫』にでてくる (中略) 山ねこの手紙の結びの言葉からうけた異常にあざやかなおどろきをわすれられない。(中略) 言葉の記憶は、わたしにはこうして、文章としての言葉というよりはるかに、言葉そのもののそなえる語りくちというか、口調の、なつかしくあざやかな記憶のただなかにはじまったのだった」<sup>7</sup>という長田自身の体験に根ざしているのではないだろうか。

翻訳については、「日本では翻訳する場合、その言葉の背景にある文化や習慣を無視しがちです」<sup>8</sup>と指摘する一方、訳詩について「もともとの詩にそなわっているイメージの力にくわえて、その詩を日本語の言葉にするのは、なにより愛着だからです。訳詩は、ですから、本質的に共感の場をつくりだそうという試みでもあります」<sup>9</sup>とその楽しみを語っている。

### 「ハードとソフトがくっついてる」

ハード面（本の形、手ざわり、色、装丁の絵、挿絵など）についても思いを述べている。

（前略）幼年物語の場合には、ほかのどの本よりもハードとソフトがくっついてるものなんです。<sup>10</sup>

とりかえのきかない「その本でなくてはいけない」本の記憶を、それぞれの胸の本棚にのこすのが、絵本という本です。<sup>11</sup>

以上のことから、長田が自ら筆をとった絵本や子どもの本、翻訳作品に込められた思いを想像することができるだろう。

本、言葉に多く向き合ってきた長田。その蔵書は8,396冊に及ぶ。彼は全ての本を読破したのだろうか。彼はこう言う。

読書というのは、そこにその本があるというだけでも、あの本があるなどおもうことだって、すでに読書の領域にはいってるんです。<sup>12</sup>

当館では、長田弘文庫の見学会を行っている（開催は不定期）。長田が手元に置き、「読書」した本に、ぜひふれてみてほしい。

最後に、長田にとっての「言葉」が何であるか、端的に語っている一文を紹介する。

「だれもがよくしっていて だれもがよくしらないもの さて いったい なあに？」  
答えは言葉。<sup>13</sup>

<sup>1</sup> 『笑う詩人』人文書院、1989年、p103

<sup>2</sup> 『なつかしい時間（岩波新書）』岩波書店、2013年、p97

<sup>3</sup> 『小さな本の大きな世界』クレヨンハウス、2016年、p287

<sup>4</sup> 『子どもの本の森へ』岩波書店、1998年、p154

詩と絵本の関係については、『クロワッサン（通巻589号）』（マガジンハウス、2002年5月25日）p108でも述べている。「心の中に詩が生まれる」「微笑をもった本」、そういう絵本には形式はポエムでなくても詩の女神ミューズがいるという。

<sup>5</sup> 『子どもの本の森へ』岩波書店、1998年、p14-15

『クロワッサン（通巻589号）』マガジンハウス、2002年5月25日、p108

『なつかしい時間（岩波新書）』岩波書店、2013年、p97 など

<sup>6</sup> 『本の話をしよう』晶文社、2002年、p49-50

<sup>7</sup> 『詩人であること（同時代ライブラリー）』岩波書店、1997年、p44-45

<sup>8</sup> 『Voice（第295号）』PHP研究所、2002年7月、P137

<sup>9</sup> 『なつかしい時間（岩波新書）』岩波書店、2013年、p117

<sup>10</sup> 『本の話をしよう』晶文社、2002年、p22

<sup>11</sup> 『小さな本の大きな世界』クレヨンハウス、2016年、p12

<sup>12</sup> 『笑う詩人』人文書院、1989年、p99-100

<sup>13</sup> 『小さな本の大きな世界』クレヨンハウス、2016年、p187

（児童資料チーム 小林沙織）